

18  
over



# HOT & COOL

sword art online fun book



# HOT & COOL

INDEX

マリッジ・ブルー

空音美樹

5



共有結合

にゃんぞー

30

サンクチュアリ

梶原千早

36



# HALCYON FACTORY





キミは誰さ

ありがとう——



116

人殺し野郎……





ミンナオマエガコロシタ

やめろ おおっ

はあ  
はあ...

はあ...

.....ん

.....くん



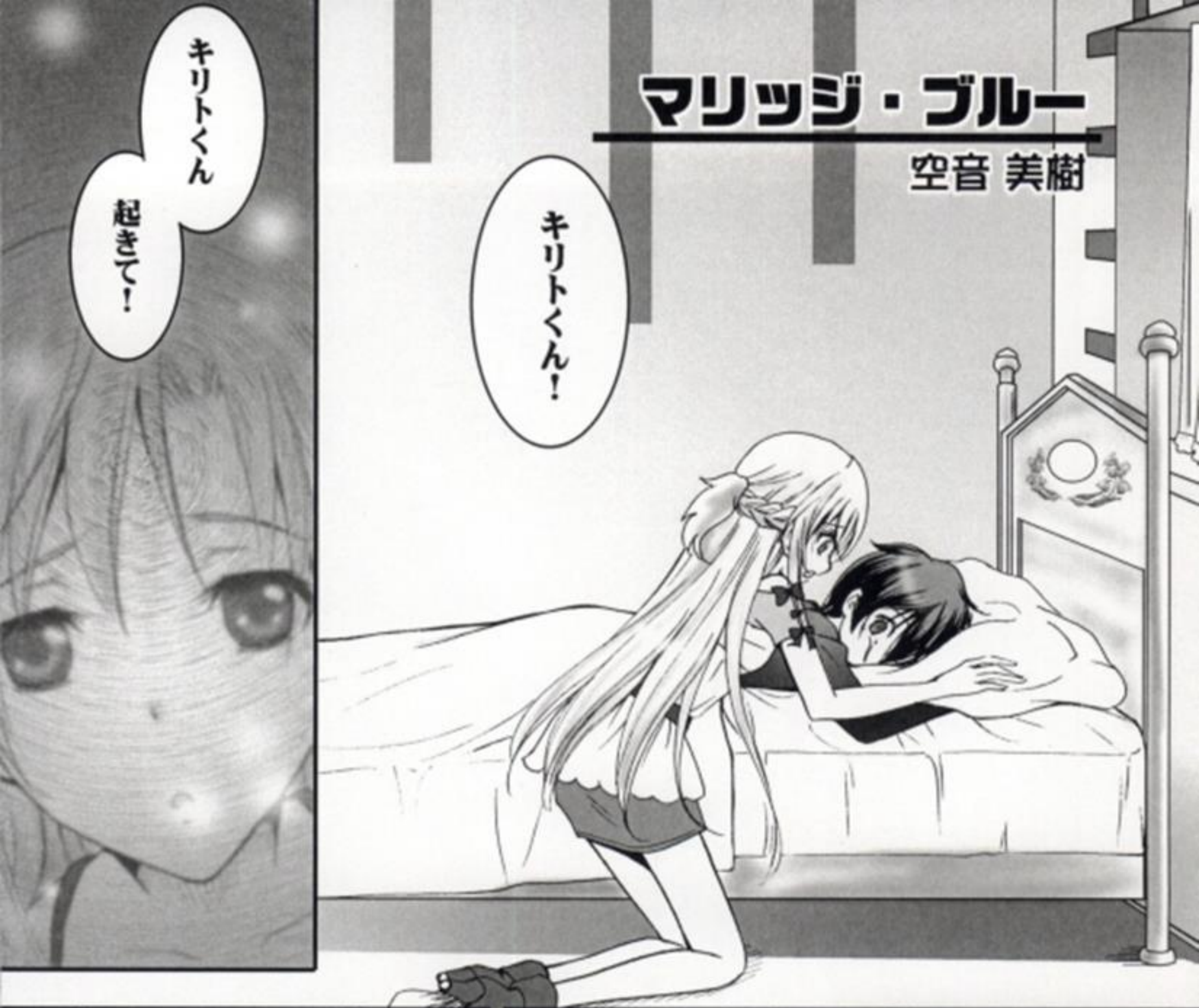
# マリッジ・ブルー

空音 美樹

キリトくん

起きろー！

キリトくん！



やな夢  
見ちゃった  
みたいだね

大丈夫？

あ…







…なんか  
恥ずかしいな

別にそんな事  
ないよ？

ううん



……おのれ  
うんぬん…



何も言わなくて  
いいよ

嫌な夢は  
胸の奥に  
しまいこんで  
さつさと忘れるに  
限るよ

それを言うなら  
悪夢ほど他人に  
話した方が  
いいらしいぞ

アスナ…

えっ！  
そうなの？

いい夢は  
ひとりでごっそり  
ニヤニヤするんだ

何それ  
やだあ

よし！

じゃあ  
このアスナさんに  
ゼーんぶ話して  
しまいなさい





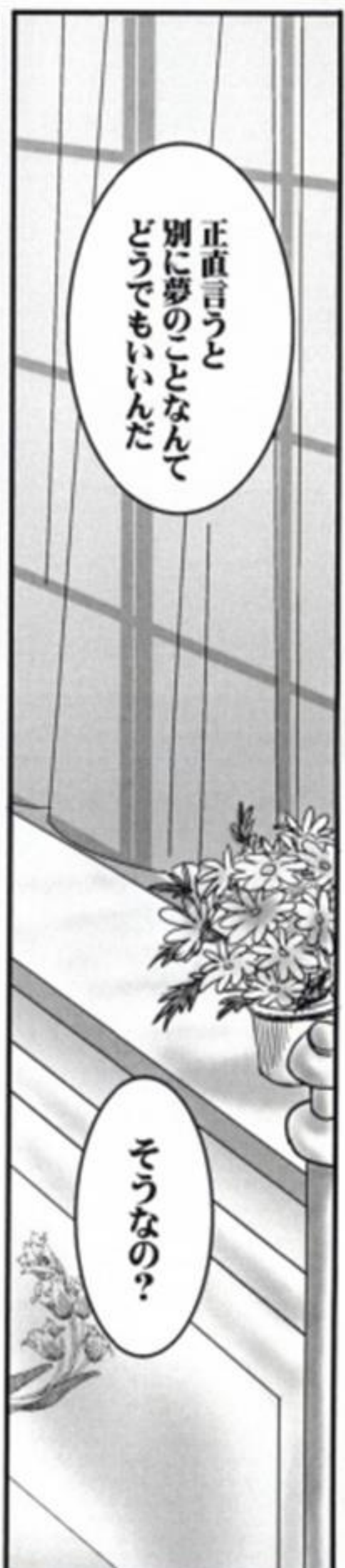
ん……



本当に……

いいのかな……

何が？



正直言うと  
別に夢のことなんて  
どうでもいいんだ

そっちなのか……



俺……

たとえ  
ゲーム内とはいえ  
人の命を  
終わらせた……

そんな奴が  
結婚とか……

ちよつと  
軽はずみすぎた  
かなって……

……後悔してるの？

プロポーズ  
したこと……



そんな  
わけない!!

そんな事じゃ  
ないんだ!!

ただ……

お前にも  
いろんな事  
背負わせる  
気がして……

私に悪いから？

?!

……



っ!!

閃光の  
アスナさんを  
みくびらないで  
くれる??

私だって  
キリトくんは  
何かあったら  
迷わず  
自分の手を  
汚すよ!

ムギギ

ユウ

今  
何が一番大事なのは  
私はちゃんと  
理解してるの!

.....!

ホンホニ  
ヒビノカ?





んっ…

あぁっ…



んっ…



アスナー…

んっ…

んあっ…

はぁ…





これが私の  
答えだよ

キリトくん

アスナ…



あれ？

昨日と違う  
下着？

当然じゃない  
もうっ！

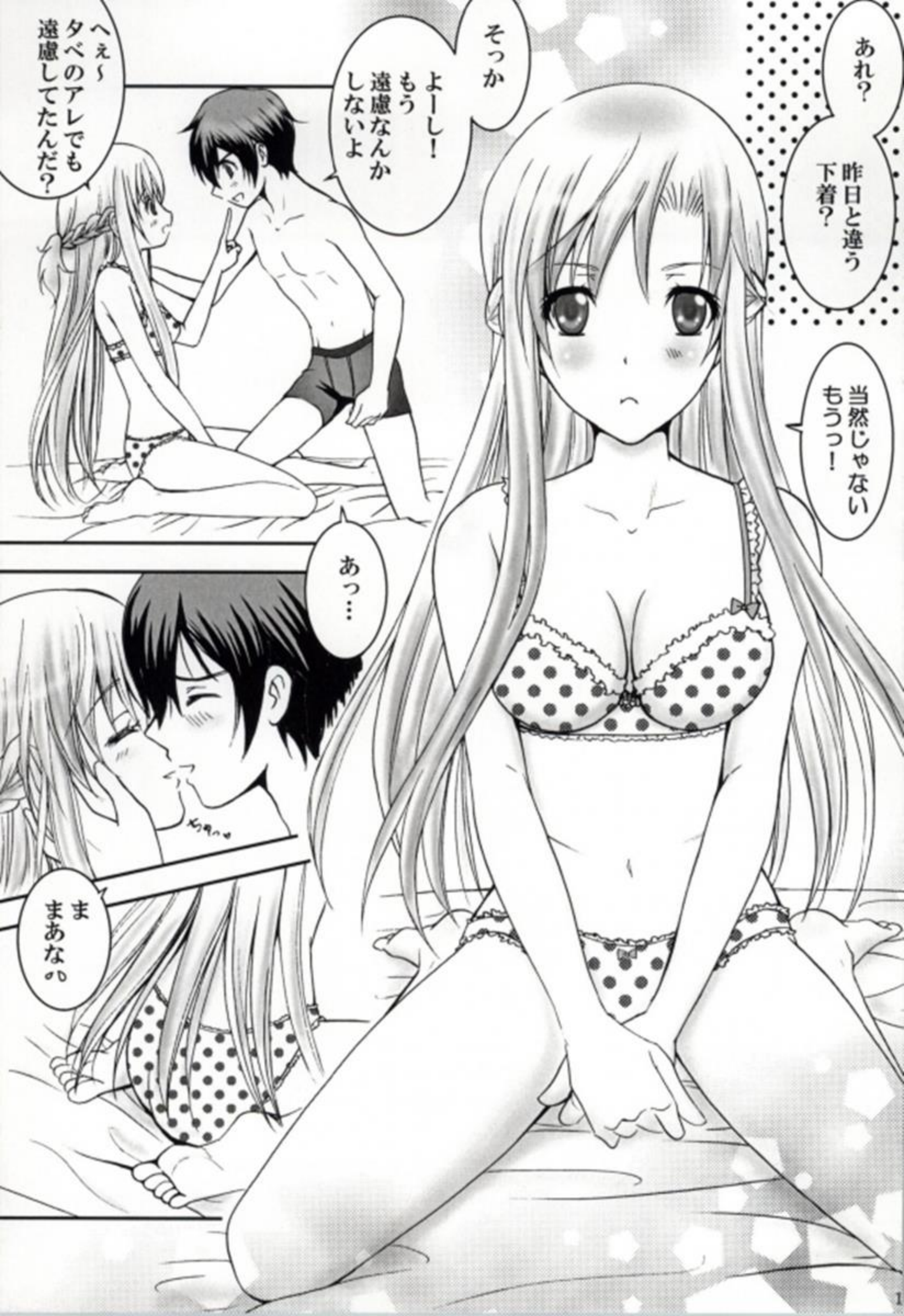
そっか

よし！  
もう  
遠慮なんか  
しないよ

あっ…

へえ、  
夕べのアレでも  
遠慮してたんだ？

ま  
まあなの









ああっん

キリトくん  
ちよつと！  
いきなり  
飛ばしすぎ！

んんんん  
んんんん  
んんんん  
(そんなの  
当たり前)



なあ…

この乳首の形とか  
大きさって本物と  
同じなのか？

むふふ  
むふふ

ちよつと

んはあ

あつちん  
あつちん  
あつちん  
あつちん





んはあ

キリトくん…

もぎゅ

もぎゅ

もぎゅ

もぎゅ

この感度の良さはアスナだからなのか

このシステムの仕業か

すこいな

やあんっ…

くちゅん

どんどん溢れてくるぞ

やだそんな事わかんないよお

キリト



このリアル感♡

何よ...

あっん

まるで他に  
知ってる  
みたいじゃない  
キリトくん

ああっ...

ちゅっ

やあん

ぬちゅっ

くちゅっ

ひちゅっ

いや

まあ...  
こんな感じかな  
と...

アクマデモ  
ソウソウノ  
ハンイデス

うふ♡

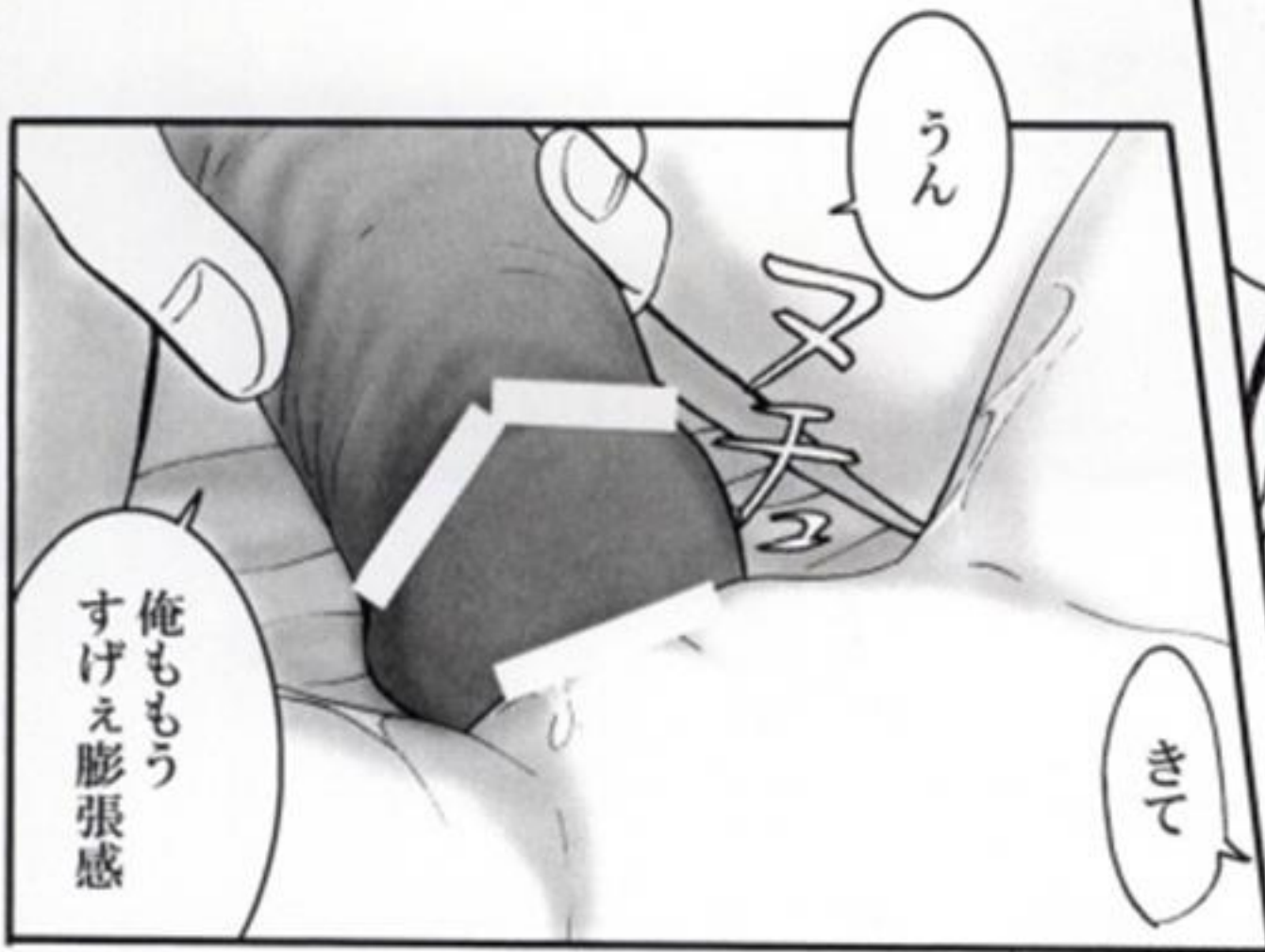
本物はもっと  
柔らかいよ

















ひゃあん

ニエエ...

ニエエ...

区画ちゃんには

しつから  
締め付けん  
でいいわ

ニエエ...

キコト...

私の体で  
色々試すの  
やめなよ...

ニエエ...

ニエエ...

#8  
—38

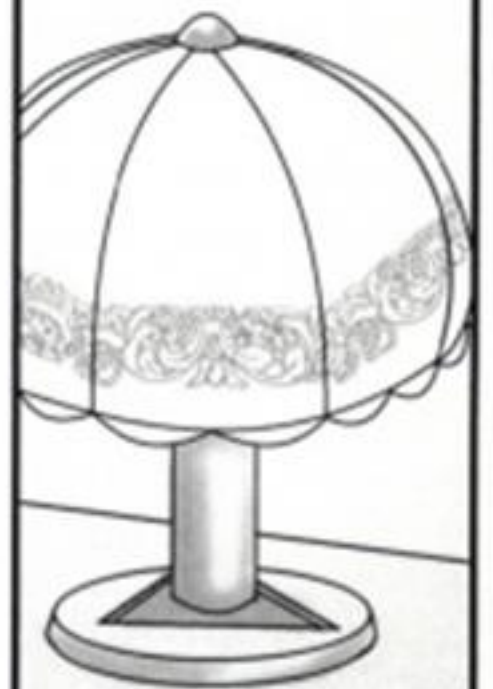
それは無理

ニエエ...













私…  
キリトくん  
以外の人と  
する気なんて  
ないんだから

今さら  
結婚なしとか  
許さないん  
だからね!

あ…



よろしく



はいはい  
光栄です



ちゅっ

なんがすでに  
結婚生活が  
詠めた気がする…



## もっと濃厚なの描きたかったのにい～

どうもどうも、毎度の皆様もお初の方もこんにちは。  
今回も戦友(?)巻き込んでの合同誌第4弾です。  
もう4冊も出してるなんて、ちょっとビックリです…よね、千早さん(笑)

アニメの2人にやられてからちょうど1年。  
あれから原作買うには買ったけど、まだ味読…オイオイ  
いかんせん1冊が厚すぎるよ(苦笑)

正直なこと言うと、はじめて  
ツルツルッのアソコを描けて、なんかもう満足(爆笑)  
もともとロリ嗜好じゃないので、一生描くことはない、とってたので  
貴重な体験ww

今度はちゃんと生えたアスナたんを…(笑)

なんかもう色々間違ってるかもしれないそんな  
不安を残しつつ、今回はこれにて。

2013年7月 某日

空音 美樹

絶対  
年下の気が  
する……  
o





—共有結合—

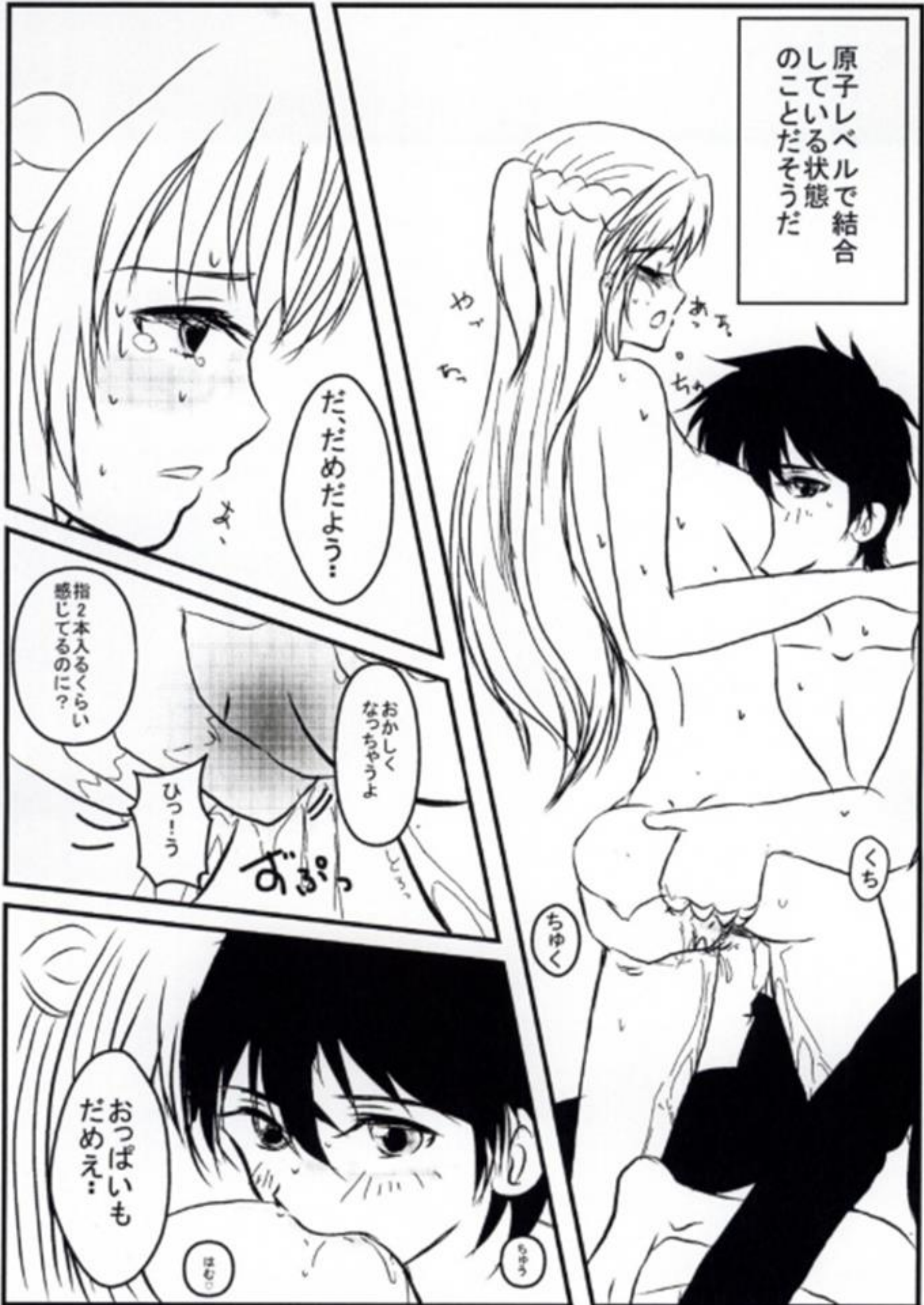
にゃんぞー



物理の時間で習った  
「共有結合」という  
現象



原子レベルで結合  
している状態  
のことだそうだ



だ、だめだよ...

指2本入るくらい  
感じてるのにな?

おかしく  
なっちゃったよ

おっぱいも  
だめえ!

やい  
ら

あ、あ  
ちゅ

びゅん

ちゅん

くち

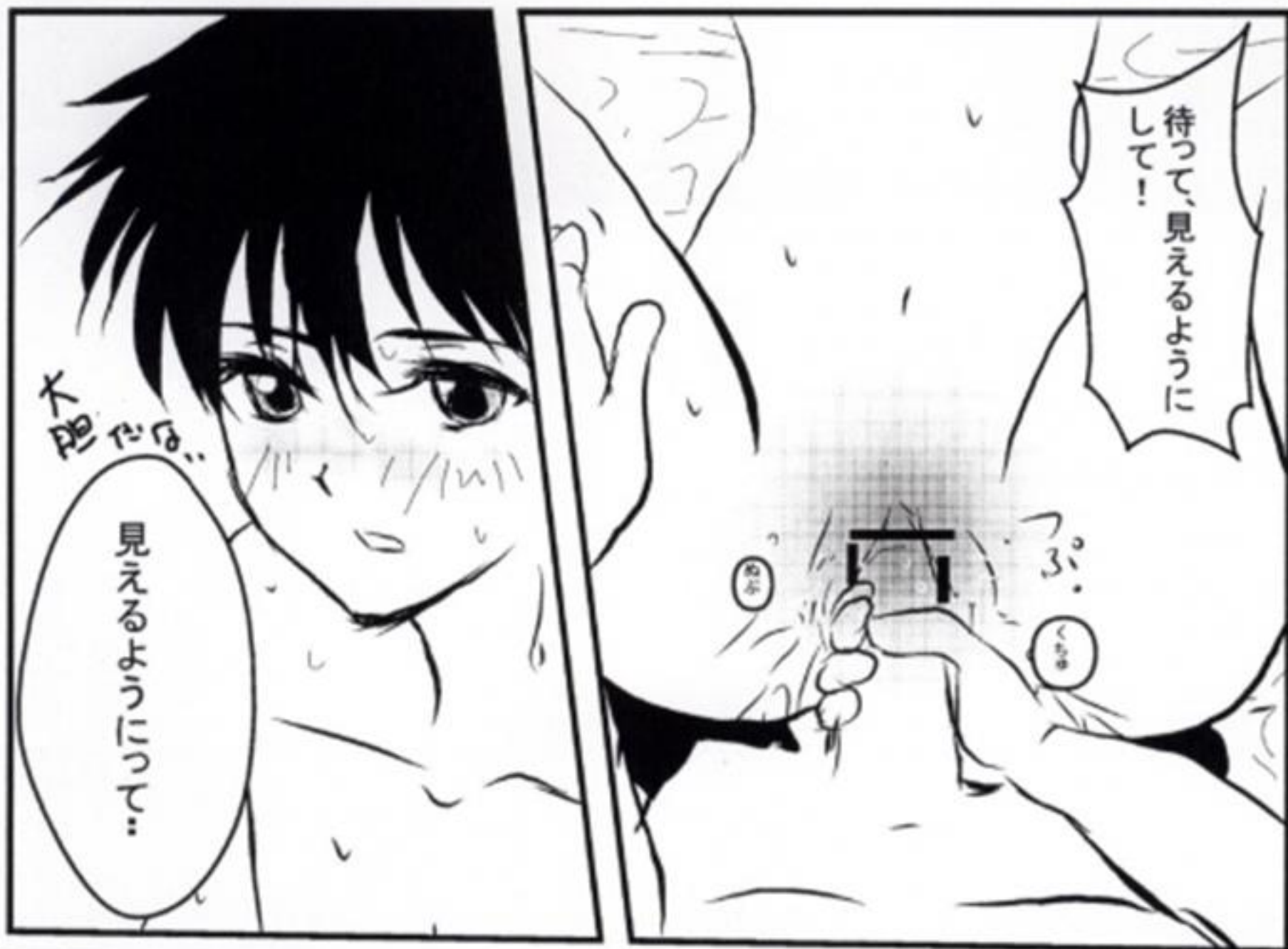
は

ら

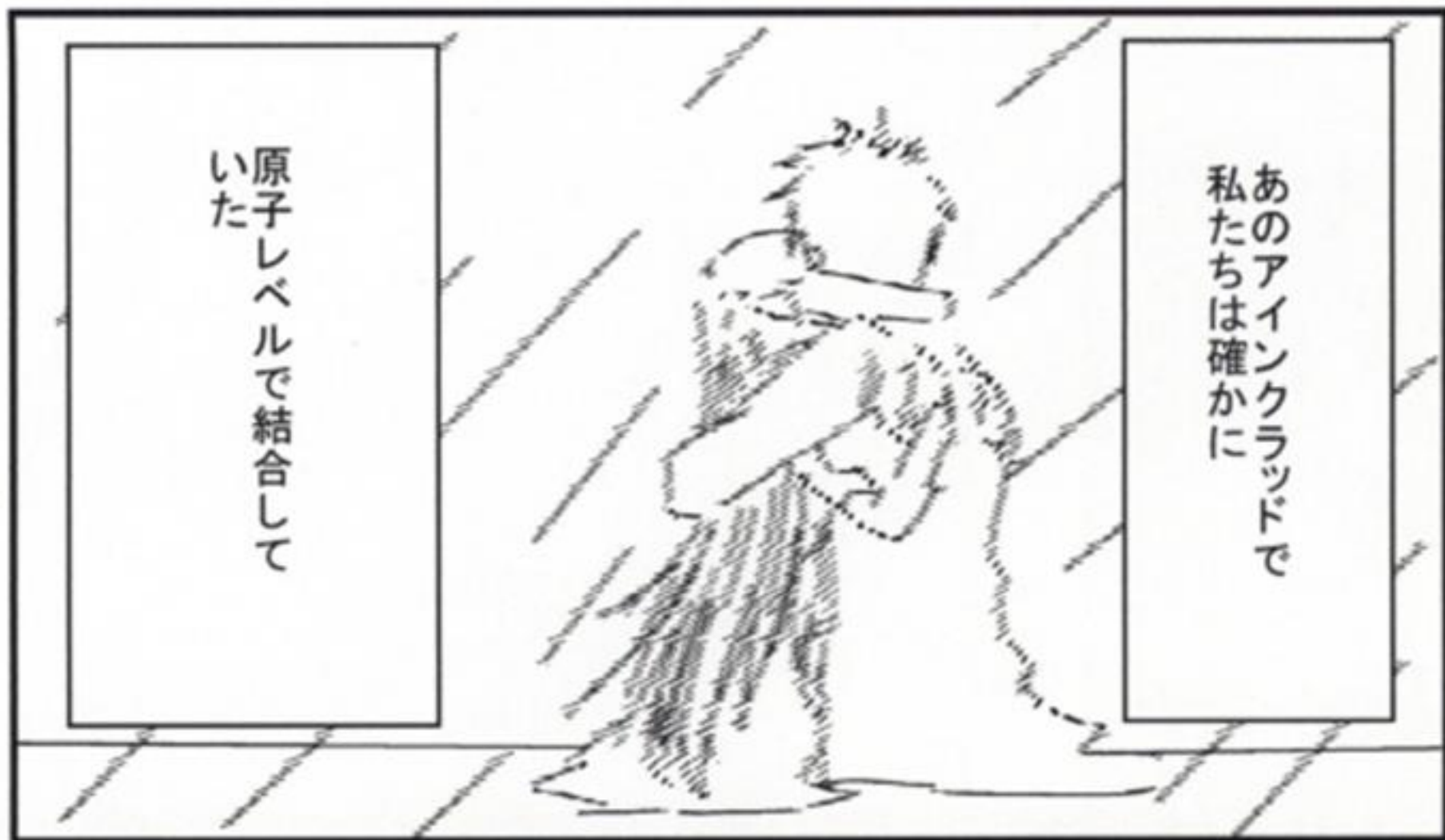












あのアインクラッドで  
私たちは確かに

原子レベルで結合して  
いた



またキリト君と  
繋がって嬉しい♡



また君と繋がれて  
嬉しい

俺も…



5pageでIロを描くって難しいと知った、40半ばの今日この頃……

かわいい甥っ子が選抜でがんばっている姿をテレビで応援しつつ、叔母はIロをひたすら描いている……

うふふふふ。

叔母さんは腐った女子だから仕方ないのさ。

さわやか高校球児がまぶしい……まぶしすぎる……

久しぶりにIロなんぞ描いたんですが、堪能させていただきました。  
好きに描いてみたのですが、まあ、経験不足なので画力、構成力がないのは目をつぶってくださいませ。

神魂合体とかのタイトルにならなくてよかったー……

皆さんの作品が楽しみだなー

プログレッシブの続きもたのしみだなー

仕事したくないなー

夏はちょっと参加したいなー……

今回も参加させて頂き、本当に有難うございます！

2013.緊張の夏！売上のかかっている夏！

にゃんぞー

だんてごん

ムトセフォー

という

しゅんぞー

12/12

ました。





# サンクチュアリ

新生アインクラッド第二十二層  
二〇二五年十二月

梶原 千早

南向きのリビングから、アスナは窓越しに外を眺めた。

雪で覆われた庭は白く染まり、常緑低木がわずかばかりの暗緑色を添えている。庭の先は白い緩やかな傾斜の丘へと続き、だがその向こうにあるはずの湖は雪に閉ざされて今は見えなかった。

アルヴ Heim と現実とは、時間はもとより天気も同期していない。現実ではよく晴れた午前であるのに引き替え、アルヴ Heim では降雪の午後だ。窓の外は降りしきる雪のために薄暗く、視界もよくない。

横並びに配置されている寝室もやはり南向きなので、そこから臨む景色はこれと同じだろう。

今年の見納めかもしれないのと思うと、アスナは残念でならなかった。

二時間後には、家族と共に京都へ向かう予定だ。年末年始を京都の結城本家で過ごす我が家の習慣が恨めしくなる。できれば皆と一緒に年越しをしたいので、アミユスフィアをこっそり荷物に忍ばせたものの、京都で時間を取れるかどうかは不明だ。

ふと思いついて、寝室と背中合わせになっている小部屋へと向かった。このログハウスを確保してから四日、内装を整えたり来客をもてなしたりと慌ただしく、物置部屋の窓の外はまともに確認していなかった。北向きの窓からは、裏庭と小川の向こうに針葉樹森が臨めるとわかっているが、以前目にしていたのは秋であって真冬ではない。

磨りガラスの窓を開け放つ。アスナは冷気に晒されて身震



いした。だがすぐに外の景色に目を奪われて、寒さは気にならなくなった。

眼前にあるのは以前と同様に杉林だ。ただし秋に見たさまとはまるで違っていた。白い雪と黒い幹とが、その濃淡を替えながら奥へ奥へと連なっている。

吸い込まれていくような感覚を覚えて、それが昔の記憶を呼び起こした。母方の祖父母の家から見えた景色だ。

切なさが一気に押し寄せた。

一方は現実世界、もう一方は仮想世界。一方は古い日本家屋、もう一方は真新しいログハウス。対照的に異なっているのに、どちらも同じ優しさに満ちている。

ああ、そうか、とアスナは思った。自分が求めて止まないのはこれだ。ありのままの自分を、そのまま受け入れてくれる人と場所。その象徴が、今はこの家——アインクラッド第二十二層の外周部に近い森の中にひっそりと建つ、小さなログハウスだった。

家は、心の還る場所であり、寛ぎや安らぎを得られる暖かで穏やかな場所である。アスナがそれを知ったのは、ほんの一年前だ。

それ以前の彼女にとって、家とは、血の繋がりに成る家族という単位の集団が、生活の基盤として居る場所ではなかった。物理的な意味で身体が帰る家屋であり、自室ですら身体を休める部屋というだけだった。

決して家族に対し愛情がないわけではなく、周囲の人々から大切に扱われているのも承知していた。それでも、どこと

ない違和感や疎外感が常にあった。当時はそれとはつきり意識していたわけではなかったため、時折感じた苛立ちが何であるのか判然としなかった。

今になってみればよくわかる。苛立ちとは、自分が求めているものとの相違に起因していた。求めていたのは、なんのことはない、自分の居場所だったのだ。

だからアスナは、その居場所を象徴するログハウスを、新生アインクラッドで再び得るのにこだわった。アップデートにより第二十一層へと続く扉が開いたその日の内に、第二十一層を突破して、第二十二層の家を購入するに至ったのはそんなわけだ。

第二十一層では、旧アインクラッドでの知識をフルに活用した。フィールドも迷宮区も最短経路を最小限の戦闘で駆け抜け、先頭に立ってフロアボスに挑み、怒濤の勢いで倒してしまった。そのボスモンスターが四散して消え去るのももどかしく、第二十二層へと向かった。

第二十二層も、フィールドで立ち止まることなく、ひたすらこのログハウスを目指した。購入ウインドウのOKボタンをクリックしたときの安堵感は、涙となって両目に浮かんだほどだ。

その後は仲間たちと打ち上げをし、彼らが帰ったあとにキリトとユイと三人で祝杯をあげ、そして大泣きした。

それほどにこの家が欲しかった。

様々な記憶と感情が呼び起こされて、アスナは目が潤んでくるのを感じた。落ち着こうとして、ふうっと大きく深呼吸



をした、そのとき――。

「アスナ？」

聞き慣れた柔らかな声音に、背後から呼びかけられた。アスナが振り返ると、開いたままのドアの脇に《影妖精族》の少年が立っている。

「キリト君……。どうしたの？」

きよとんとした表情を浮かべていたキリトは、苦笑しながら近づいてきた。

「それはこっちのセリフ。アスナは今日から京都に行くんじゃないかった？」

「そうなんだけど、出かけるまで少し時間ができたから来ちゃった」

「そうか。……ところで寒くない？」

「言われてみれば」

アスナが物思いにふけっていたのは、思いの外長い時間だったらしい。外気温に影響されて身体がこわばっている。

寒さを感じるだけでなく、こんな細部まで作り込んでいるのだな。などと変なところに感心していると、気付けばキリトの両腕の中に抱え込まれていた。

「アバターだから風邪を引く心配がないのはいいけどさ」

体温もきちんとアバターに再現されているので、そのぬくもりが彼から伝わってくる。

「ほら、冷え切ってる」

「うん」

アスナは小さく返事をして、キリトの肩口に顔を埋めた。

「アスナ、ひよつとして泣いてた？」

「……ちよつと泣きそうになっただけ」

顔を上げて、もう一度窓の外を見つめる。

「この景色ね、四年前に亡くなった祖父母の家から見た景色とよく似てるの」

「そうなんだ」

「だからなおさら、この家がたいせつ思えてきて……。それから他にもいろんなことが思い浮かんで……」

自分の感情を上手く言葉にできそうになかった。アスナは懸命に伝えようとしたが、いつもの理路整然とした話し方と違って、辿々しくなってしまう。

「とにかくね、この家がわたしにとっていかに重要かを噛みしめてたところなのよ」

最後は冗談っぽくごまかそうとしてみたが、キリトは十分に理解してくれていた。

「うん、アスナが言おうとしてること、なんとなくだけどわかるよ。たぶん俺が望んでいるものとすごく近いと思う」

「……ありがとう」

おずおずと笑いかけてから、アスナはキリトの腕をそっと抜け出した。

両開き窓を閉めにかかる。片方を引き寄せている間に、反対側はキリトが締めてくれた。

二人はリビングへと戻った。

促されて、アスナは暖炉前のソファに腰を下ろす。するとキリトに後ろから抱きしめられた。



アスナの左頬に、キリトが右頬を寄せてくる。

「まだ冷たいな」

「それじゃ……キリト君が……温めてくれる？」

アスナが視線を向けると、キリトが一度顔を離してから、返事代わりの軽いキスを寄こした。

「時間は大丈夫なのか？」

「うん、まだ一時間以上あるから」

場所を寝室に移し、並んでベッドに腰を下ろす。

揃ってメニューウインドウを表示した。まずは倫理コードの解除を済ませ、続けて装備を順に解除していく。すぐに二人とも下着姿になった。

アスナはゆっくりとベッドの上に押し倒される。彼女を取り巻くように、水妖精族の水色の長い髪が白いシーツ上に広がった。

覆い被さってきたキリトが、彼女の髪を指に絡ませながら掬い上げる。その一房に口づける仕草で、早々とアスナの胸の奥は疼いた。

「キリト君……？」

顔を上げたキリトと視線を絡めて、アスナはキスをねだった。キリトの唇が下りてきて重なる。啄むようなキスは間もなく深いものに変わり、唇を舐め合い、歯列を探り、やがて二人は舌を絡めた。

アスナは頭の奥が痺れてくるのを感じた。

キリトの唇が離れていき、だがすぐに首筋を這う。反射的にアスナは上体を浮かした。すかさずキリトの片手が背中に

回って、ブラのホックの位置で動いた。

「キリト君」

「あつ間違えた」

二人の声が重なり、次に互いの顔を見合わせてプツと吹き出した。現実であればその手順でよかったのだが、今は仮想世界のアバター姿だ。下着もメニューウインドウで解除しなければならぬ。

アスナは手早く操作して、残っていた最後の装備を消し去った。キリトも同様にする。

「やだ、もうそんなに大きくしてるの」

「しかたないだろ。それだけアスナさんが魅力的だということですよ」

笑い合いながらも一度キスをした。

再びアスナの体を、キリトの唇や指がゆっくりと這い回り始めた。快楽はすぐに羞恥心を上回り、アスナの紅唇から喘ぎ声がこぼれた。

キリトの手がアスナの下半身へと先回りした。一番敏感な部分に直接触れられる。

「あああんっ……」

一際大きな声を上げて、アスナはキリトにしがみついた。少年の指は優しく秘所を動き回る。自分の中心部が蕩けさせられる感覚に、理性はどんどん遠のいていく。

いつのまにか胸の頂を口でいじられ、反対側の乳房は揉みしだかれています。身体のうちこちらから押し寄せる波に、アスナの意識は浅われそうになった。



「キリト君、わたし……もう……」

「いっていいよ」

「でも……キリト君……まだ……」

いたずらでもするような表情になったキリトが、アスナの身体の中心部に位置する小さな突起を強く捏ね回した。

「ひやつ、やああ」

悲鳴のような声を上げたアスナが、大きく全身を跳ねあげた。それから脱力したように力が抜ける。

「いった？」

「……もう……いつもキリト君……あたしばかり……」

キリトが顔を覗きこんできたので、アスナは懸命に言い募る。だが、可愛らしい膨れっ面と、途切れ途切れの艶のある掠れ声では、相手に対して少しも抗議になっていない。気付いていないのは本人ばかりだ。

「わかったよ。今度は一緒にいこう」

「……うん」

キリトから触れるだけのキスを与えられて、アスナは仕方なく微笑を返した。

「入れるよ？」

「来て……」

キリトのものが、潤みきった中心部にあてがわれた。ゆっくりと侵入してくるのを感じながら、アスナは快感と幸福感の入り交じった感覚を覚えた。

「……ん、んふ……」

奥まで入りきると、一時いつときおいてキリトが動き始めた。動き

はじきに激しさを増す。

「ごめん、余裕ないや」

アスナの中が、激しく突き上げられる。達したばかりだった体はすぐに反応した。唇からは絶え間なく艶めいた声が漏れる。

最奥を打ち付けられ、アスナの中で意識がはじけ飛んだ。

息が止まりそうな感覚に襲われる。

「キ……リト君」

「アスナ……俺も……もうダメだよ……」

キリトの囁きが耳に届いた。切羽詰まった声音だ。

直後、それまでの激しい動きが止まる。ぎゅっと抱きしめられて、アスナも彼にしがみついた。内部に放たれたのがわかる。

やがてキリトの体から力が抜けるのを感じた。息の乱れが

治まるまで、二人ともしばらくかかった。

先に身体を起こしたのはアスナだった。

「そろそろ行かなくちゃ」

「うん」

キリトものろのろと上体を起こす。彼の表情に一抹の寂しさが浮かんだような気がして、アスナはにっこりと微笑みかけた。

「四日の昼には帰ってくるからね」

「わかった」

「わたしの家はここだもの。いっただって、どこに行っただって、必ずここに帰ってくるよ」



「……そうだな。うん、俺もだ」

話しながら、二人は装備を装着していった。

「それにね、いつかもしこの場所を失う日がきたとしても、わたしたちはまた一緒に家を探せると思うの。えっと、言いかた、抽象的すぎるかな？」

「いや、わかるよ」

「それならよし」

もう一度極上の笑みを浮かべてから、アスナはおもむろに立ち上がった。その顔からは、ついさきほどの心細げな表情は消え去っていた。

(終わり)

## Postscript

真夏発行の本になんで真冬の話を書いてるんだろ、と自分が一番不思議です。え～、小説担当千早です。ホントになんでこうなるんでしょーねー。

お題はインクラッドでのクリアスエロということだったので、素直に新婚生活を書けばいいのに、そしたら季節は秋だから、真冬ほど違和感ないのに……。いえ、そのつもりでいたんですけど、プロット作ってから原作と辻褃を合わせていたら、なんかこうなっちゃいましたとさ。

恒例、言い訳&謝罪コーナーでございました。

なにはともあれ、ほんの少しだけでも楽しんでいただけたなら幸いです。

梶原千早拝



# HOT & COOL

sword art online fun book F<sup>o</sup> A<sup>o</sup>U<sup>t</sup>



HALCYON FACTORY

